



Title	<翻訳>『乙女の変身』(1)
Author(s)	中村, 未樹
Citation	大阪大学英米研究. 2024, 48, p. 39-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99600
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

翻訳『乙女の変身』(1)

中村 未樹

以下に掲載するのは作者不詳の劇 *The Maid's Metamorphosis* の Act 1, Scene 1 から Act 3, Scene 1 までの日本語訳である。底本としたのは R. Warwick Bond 編集による *The Complete Works of John Lyly* (Clarendon Press, 1902) の Volume 3 に収録された *The Maydes Metamorphosis* である。

乙女の悲劇

ポール少年劇団で何度か上演される

ロンドン

ロング・レーンに居住するリチャード・オリーブのため

トマス・クリードによって印刷される

1600 年

序詞

あなたから多様なご厚意を弱い私たちはいつも頂いております。

あなたの美徳だけがそのご厚意の源であり

このように支援していただく価値は私たちにはありません。

何らかの方法で私たちに表させてください

(といたしましては私たちには他に何の手段もないのですが)

私たちの力の及ぶ限りの感謝の気持ち以外で。

広大な海のようなあなたに向けて

この小さな水滴を私たちは献上します。
それを他から切り離して取り出すことはできませんが
熱意によって私たちの気持ちを伝えさせてください。
水滴は大きな河の流れを減らすことなく増やします。
この小品はわたしたちの善意を損ねることなく補足するものとなります。

『乙女の変身』

第 1 幕

第 1 場

フィランダー、オレスティーズ、ユーリミン登場。

ユーリミン フィランダー、そしてオレスティーズ、どのような思いがあなたたちの心を悩ませているのですか。こんなに遠くまでやってきたのですから、歩きながら何かとても愉快な話を考えてください。空気は涼しく夜も更けて美しいのに、なぜあなたたちの表情は曇り、絶望したように見えるのですか。

フィランダー 美しいユーリミン、私は話をするのが得意ではなく苦手なのです。オレスティーズの気が向くようでしたら、私よりも彼の方がそうしたことはうまくできるでしょう。

ユーリミン ではオレスティーズ、何か昔の、あるいは最近の物語を話してください。別の機会に、これ以上ではなくても同じようなことを私に頼んでよいですから。

オレスティーズ いいですか、今（理由は言えないのですが）私の心にはいかなる陽気さもそぐわないのです。と言いますのも、私は心の中で悩みを

抱えていて、僅かな喜びをもたらすような話さえ伝える気にはなれません。むしろ涙を浮かべて、昼が夜になればいいと願っています。今は陽気にはなれませんし、あなたの気に入るようなことは何も話せません。

ユーリミン それはいつもの憂鬱症でしょう、気が向くときにしか陽気にならないのですから。

フィランダー では、ユーリミン、オレスティーズがその仕事を拒絶しましたので、私がああなたの願いを叶えましょう。私の話には喜びは少ないですが、時を過ごすには役立つかもしれません。

ユーリミン ありがとう、フィランダー、では好きな時に話してください。何も無いよりは下手な話の方が良いですから。

フィランダー 昔、ここから遠くないところにある公爵が住んでいました。名声が高く優れた美德を持ち、彼にいつでも従う家来を抱えていました。あらゆる面で愛されていましたが、彼が他の何よりも誇りにしていたのは(老いた彼の希望であり親族の慰めであったのは)一人息子でした。素晴らしい若者で、徳、外見、知能において誰に劣ることもなく、公爵の後にその地位に就く予定でした。この若者が立派な大人になった時には、高貴な血筋の女性と結婚の絆で結びつけたいと公爵は願っていましたが、息子はいつも父親の意思に逆っていました。

ユーリミン その方は人を愛する気持ちがまだ出来ていなかったのではないですか。

フィランダー いいえ、話の続きが明らかにするように、その気持ちは十分にあったのです。彼の心は愛のため全く別の方向に向いていて、父親が決めた選択にはいつも従わず、結婚の問題を何度も引き延ばしにしていました。遂には同意したと希望を与えておいて、その後にはまた自分の思いについて言い訳をするのです。

ユーリミン 何が彼にそのような反抗的な行動をとらせたのですか。

フィランダー 別の恋です——それがこの混乱を生み出しました。といいますのも、彼の父親の宮廷には、青年が最も尊ぶ聖人が居たのです。美しい

女性で君主に抱擁されるにふさわしい純粋で貞潔な乙女でした。もし彼女の生まれが（卑しい家柄であると言われていましたが）その美しさに見合うものであったならば、人々の意見は抑えられたでしょう。強情な若者は彼女をずっと愛していて、他の誰でもなく彼女だけが彼の愛情が仕える主人だったのです。度々、父親はそのように卑しい生まれの乙女を愛することを思いとどませようとした。しかし、彼が息子の気持ちを変えようと躍起になればなるだけ、ますます息子は恋で盲目になったのです。

ユーリミン ああ、その愚かな恋人たちはそれからどうなったのですか。

フィランダー 野蛮で最も粗野な人間でさえ悲しませるようなことに。その後、息子の凝り固まった心をそのような不名誉から引き離して本来の高い地位へと戻そうと公爵は努力しましたが、それも無駄になったので、彼はある計画を考え始めました。誠実な彼の家来二人に、厳かな誓いを立てさせて命じました。その愚かな乙女を人目につかないところに連れていき、密かに奪うように――

ユーリミン 何を――彼女の命をですか。

フィランダー そうです、これまでの全ての争いの原因であった彼女の命を。

ユーリミン その二人は彼女を殺したのですか。

フィランダー もうすぐそれは聞くことになるでしょう。最初に、この質問についてあなたの意見を決めてもらわねばなりません。あなたはどうか判断されるでしょうか。誰が最も残酷か仰ってください。命令に従った者でしょうか、あるいはその命令を下した人でしょうか。

ユーリミン 各人にとってそれは残忍な行いです。しかし、（双方に関して私の考えを話すならば）誓いによって命じられた者たちは許しに最も値するでしょう。

フィランダー 私たちはあなたの判断を受け入れます。あなたがどうなるか、責められずに済むのなら十分です。

ユーリミン 責められずに済むとは――私はどうなるのですか。その言葉の

意味は何でしょうか。

フィランダー ユーリミン、私の舌は震えて言えません、私の良心は悩み、私の感覚は弱まり、ためらっています。不明瞭な言葉は私の罪深い思いを露わにし、言伝を伝えようとしてうまく言えずにいます。

ユーリミン ああ、私の胸に迫るこの恐怖は何なのでしょう？

オレスティーズ では、フィランダー、私が残りを話すことにしよう。乙女よ、あなたの境遇はこの話のようになるのだから、理由は聞かないください。あなたはすぐに死ぬ準備をしなければいけない。ですから、急いで、そして落ち着いてください。

ユーリミン フィランダー、これは本当なのですか。あるいは冗談を言っているのですか。

フィランダー あなたは死ぬしかないのです。私はあなたに合わせて悲劇の物語を作りました。私の主人である公爵が私の話の中の男性で、その息子は王子、卑しい生まれの乙女はあなた（アスカーニオが溺愛し、いかなる理由であれ心を他には移そうとしない人）なのです。公爵は私たち二人によってあなたを殺すと決めたのです、息子とあなたの恋を終わらせるために。そのため、私たちはあなたをこの森まで連れてきました。ここであなたは自分の最も大事な血を捧げねばなりません。

ユーリミン 私の流す涙を考えてください。

オレスティーズ 我々は誓いを考慮せねばならないのです。

ユーリミン 私の若さを――

オレスティーズ それらはどれも些細なものです。

ユーリミン 私が無実であることを――

オレスティーズ それでは私たちの約束を破ることになってしまいます。急いでください、あなたの話を聞くことはできないのです。

ユーリミン 涙、そして無実であることもあなたを動かすことができないのでしたら、天の神の力が存在することを思ってください。

オレスティーズ 座りなさい、一日中ここに立って説教を行ってはなりません

ん。

ユーリミン 避けられないのなら、善良なあなた方をお願いします——私が二度と会うことのない彼に向けてお別れの歌を歌う間、待ってもらえないでしょうか。

フィランダー あなたの苦痛にそのつかの間の休みを与えましょう。

ユーリミン ですが、死の恐怖が私の心を慄かせるといけませんので、紳士の方々、願いを聞いてください——このスカーフで私の視界を覆ってください。致命的な一撃が私に向けられた時、私が驚いたりせずに我慢できるように。

オレスティーズ わかりました。渡してください。これで間に合うのでしたら、あなたを恐怖から守ってあげましょう。

ユーリミン そうだとよいのですが——暗闇はそのような力は持たないのです。

彼女は歌う。

聖なる火 そして天の神々

愛を鍛える欲望の炉

下を見てください 見てください

哀れな乙女を

私が捧げるのは恋人の血

目から塩辛い涙が洪水となって溢れます

その全てを流すのは その全てを流すのは

あなたのためです アスカーニオ 私の愛しい人

この時間に 私を刺す鋼の苦さを感じなければいけません

結果はどうであれ 悪くても良くても

あなたに アスカーニオ ずっとお別れの言葉を

オレスティーズは剣で彼女を刺そうとするが、フィランダーに制止される。

オレスティーズ どういうつもりだ、フィランダー？

フィランダー 彼女を刺すのは止める。彼女の哀れな嘆きと仕草を見れば、

固い石でさえ悲しむだろう。

オレスティーズ お前は誓いを忘れたのか。

フィランダー 忘れただと？そうではない。

オレスティーズ では、なぜこのように私を遮るのだ？

フィランダー 恐怖が突然、私の考えを打ち負かしたのだ。

オレスティーズ では、私にまかせてくれ、私は何も恐れはしない。

フィランダー 待て、オレスティーズ、まずは私の理由を聞いてくれ。

オレスティーズ お前は誓約の義務を忘れたのか？好きにすればいい、だが、私は忘れてはいない。

フィランダー オレスティーズ、お前が誓いを守ることに固執するのなら、私が我々二人のため責任を持って答えよう。

オレスティーズ どのように答えるのだ？俺は待ったりはしない。

フィランダー 悪人め、それなら私は剣を使って前に進もう。

オレスティーズ 今回の事に関して、お前は良心に逆らうのか。

フィランダー 私が生きている限り、女性を守る。乙女でしかも無実だ、だから剣をしまえ、さもなければ機会を待て。

オレスティーズ 私は決して剣を取めたりはしない——我々の誓いが保たれ、また、彼女を解放しても良いということをお前が示さない限り。

フィランダー そのようにしよう、もし真実が十分な力を持つのなら。

オレスティーズ それならば、改悛することを喜んで受け入れよう。

ユーリミン 家を出たときは全く思いませんでした、このように私の命について議論が行われるとは。

フィランダー 不法な動機による合法的な誓いは、まず理性の法によって行われる。次に、目的について考慮しなければいけない。意思がそれを良くも悪くもするのだから。まず、目的は君もわかるとおり殺人であり、それを実行するのに君は誓いを根拠としている。しかし、動機が邪悪で不当なものであるから、結果も同じように忌むべきものとならざるを得ない。我々は殺すという誓いを立てた、そして神は殺人を禁じている。私たちは

神に従うのだろうか、あるいは人間の意思に従うのか。それに、死を宣告されたのは女性だ。女性が血を流すのを見ても平気な男性とは果たして何なのか。

オレスティーズ お前の勝ちだ——ユーリミン、立ちなさい。大金と引き換えでも、君に触れたりはしない。

フィランダー 今、君は人間の姿をして見える。だが、美しい乙女、あなたを生き延びさせることにしたから、私たちに固く約束してください——これ以降、この国を立ち去り、冷酷なテレマクス、つまり怒れる公爵の目の届くところには来ないようにすると。そうすれば、我々も非難を受けずに済みます。

ユーリミン ここで私の純潔な汚れない手にかけて誓います、この呪われた土地を捨てることを。そして誓います、どのようなことが起ころうとも、この人里離れた森にこれから住むことを。

フィランダー 今、足りないのは適切な言い訳だけだ——公爵が計画した殺人が実行されると彼に信じさせるための。彼女が殺されると公爵が納得し、我々がこれまでどおり彼の寵愛を得られるように。

オレスティーズ こうしよう——すぐ近くに、低木の生えた薄暗い空き地がある、いかなる人の目も我々の欺瞞を見つけることはない。そこで山羊と牛たちが草を食んでいる。その子どもをどれか捕まえて、彼女の代わりに剣で殺そう。その後で、激しく呼吸しているその胸を引き裂いて、罪のない動物の心臓を取るのだ。我々の嘘の報告が本当らしく見えるよう、それを宮廷に持って行こう。血だらけの剣を抜いて、これが彼女の心臓ですと主張するのだ。

フィランダー ではこのリネンのベールも持っていこう、テレマクスはこれを彼女が着ていたことをよく知っているから。一面を血で染めよう。どうですか、このベールは止めておきましょうか。

ユーリミン これも、あるいは他の物でも——あなたたちの話を証明するためでしたら。ありがとうございます、フィランダーとオレスティーズ、暴

君の怒りから私を救っていただいて。

フィランダー これ以上の親切を行う力が私にあったらよいのですが。しかし、行動で表せないことは、心の中で祈ります——あなたの悲しみが和ぐように。

ユーリミン これで二つの借りができました。しかし、行かれる前にもう一言だけ。私の愛するアスカーニオによろしくお伝えください。彼の変わらぬ愛、そして彼のことをあきらめるのは他のどの悲しみよりも私を苦しめます。

オレスティーズ 私たちの命を惜しむことなく、彼に仕えます。

フィランダー 彼に危険が及んだ時は、死んでもお守りします。では乙女、幸運があなたを導きますように。

オレスティーズ そして他にも幸せなことがあなたを導きますよう。

フィランダーとオレスティーズ、退場。

ユーリミン あなた方にも同じ幸せをお祈りします。そして苦しみのない多くの幸せな日々も。今から、ユーリミン、考えてみよう——ひどく落ちぶれた、そして運命に押しつぶされたあなたの境遇を。どんな希望が残っているのだろうか？どこに喜べることがあるのだろうか？人に勝てることと言えば、この辛さだけ。もし誰か不幸を語れるとしたら、ああ、哀れな私、私はその女性。両親も知らず、友人もなく、期待できることと言えば不幸がもたらすものだけ。追放されて、一人で逃亡者として生きる——知らない道で、まったく知らない場所で。見てください、アスカーニオ、あなただけのために、私はこのような辛い旅をしなければなりません。ですが、不満を言ったりはしません。あなたのために苦勞するのですから、私には苦しみは小さく見えます。

森番のシルヴィオ登場。

シルヴィオ やあ、美しい妖精さん、あるいは女神でしょうか。あなたのような身分の人が誰もいない森の中を一人で歩いているのは不思議に思うのですが。

ユーリミン あなたが私の悲しみを知っていたら、それは驚くことではないのです。でも、こうして私に問いかけるあなたは誰ですか？

シルヴィオ 私の服を見れば分かる通り、森番です。元気な鹿の群れを見失ったのですが、ここで見つかるのではないかと期待していました。

ユーリミン 一頭も見ておりません。それではさようなら。

シルヴィオ 待ってください——あなたの境遇をもっと話してください。私はあなたに危害を加えるつもりはありませんから。

羊飼いのジェミュロ登場。

ジェミュロ 私のところの小僧が魔法で連れていかれたと思うのだが——やあ、森番さん、君の小道で可哀そうな私のモプサを見かけはしなかったですか？

シルヴィオ いいえ、羊飼いさん、なぜここで探しているのですか。

ジェミュロ そのいたずら小僧が、失敗したことで私に叩かれるのを恐れて、この辺の木の中に隠れているかと思ったのです。ところで森番さん、あなたは勘違いしているようですが、この人は女の人で、子供のいない雌鹿ではありませんよ。

シルヴィオ そのとおりです、そして悩んでいるように見えます。彼女の悲しみを知るために尋ねてみたのですが、まだ打ち明けようとはしないのです。

ジェミュロ おそらく私には話してくれるでしょう。話してごらんなさい、ご婦人、どのような大きな危険がこの場所へとあなたを追い立てたのですか？あなたの境遇を教えてください。羊飼いの僅かな力でできるような些細なことであれば、私がこの野原を去るまでには必ずしますから。

ユーリミン ああ、親切な方、私が一人ここに居ることを強いた原因は知ってはいけないことなのです。

シルヴィオ しかし、恐れずに、あなたが何者か打ち明けてください。あなたの悩みを私たちが和らげることができるかもしれませんから。

ユーリミン 私の悲しみを話すことをあなた方が強く望まれますので、私が

それで慰めを得られるかどうかは気にしないでおきます。私の悩みは、すぐに絶望してしまうようなことなのです。では、話しましょう——ここから遠くないところに私の両親が住んでいます。世間の評判も良い人たちなのですが、私を強く脅して、今日、隣の息子と結婚することに同意させました。私が結婚する相手は、生涯決して好きになることができないような人なのです。ですから、永遠に囚われの身となるのを逃れるため、今朝私はその人たちを置いて、家を出てきました。

シルヴィオ いいかい、乙女、あなたの意志に反して結婚させようとするとは、その人たちは随分冷たい人だ。

ジェミュロ それに、無理強いするのは親らしくない。ですが、あなたの正当な嘆きを聞いたところでは、あなたは自分の生まれた家に戻ろうとも、もう一度住もうとも思っていないようですね。

ユーリミン 私の願いはそうです——もし私が住める隠れ家を得ることができたらですが。

シルヴィオ では、私と一緒に行きましょう、私の小屋は遠くないです。あなたの健康と身の安全のためになるよう、もてなしますから。

ジェミュロ 待ってくれ、森番、君は自分ができる以上のことをしようとしている。私の家のほうが近いです。私の善意は木で出来たようなものよりは良いです。ですから一緒に行きましょう、私があなたを守ります。

シルヴィオ 私は緑で囲まれた木陰に彼女を連れていこう。

ジェミュロ 私は女王も喜ぶ東屋に彼女を連れていこう。

シルヴィオ 私の食卓では鹿肉で彼女をもてなそう。

ジェミュロ 私たち羊飼いが彼女に提供できるのは小ヤギと子羊だ。

シルヴィオ 他にはないのか？

ジェミュロ 豚やガチョウ、雄鶏、雌鶏も時には出すだろう。

シルヴィオ この木陰の小道は私のものだ。

ジェミュロ それなら、僕はミツバチが沢山いる庭を持っている。毎晩、毎朝、そのミツバチの音が花の甘い香りとともに彼女の五感に挨拶するの

だ。

シルヴィオ ナイチンゲールがいつも私の時計になってくれる。

ジェミュロ 私のところでは、眠ることなく、罪を思い出させる雄鶏が時計代わりだ。

シルヴィオ 狩りの時には私の獵犬たちが彼女を困らせるだろう。

ジェミュロ 私は牧草地と実りの多い土地を見せることができる。

シルヴィオ 森には心地よい泉が沢山ある。

ジェミュロ 向こうの谷の間では毎日本霊が歌っている。

シルヴィオ 田舎者の羊飼いがこうやって無謀にも森番と張り合おうとするとは驚きだ。いいか、狩りは王の娯楽であり神々も行っていた。ダイアナは弓と鋭い矢を持って森の緑の中狩りをした。同じように、善良なアテネの騎士、素早いアクテオンも狩りを楽しんだ。そしてアルカディアの女性アタランタはこの遊びを気に入って、お付きの妖精たちとともにカリュドンの猪を追ったのだ。

ジェミュロ 同じように、アポロンも羊飼いの杖を持って歩いた。そして多くの王たちが、我々羊飼いの知っている静かな人生を送るために笏を手放した——それを彼らの嘆きから逃れる場とみなしたのだ。

シルヴィオ だが、我々はいくつもの心地よい道を選べるし、鹿たちが歩き始める様子を見ることができる。鹿たちはそれぞれの年齢と時に合わせて首を伸ばし、高貴な心を持っている。野原の中、群れを先導する元気な雄鹿が仲間たちを整然と率いていく。身分の低い鹿たちはあちらこちらに散らばり、あまり近くにはいかにないようにしている。

ジェミュロ 羊飼いは丘の上、あるいは水車小屋の涼しい日陰に座り、笛に合わせて歌い、隣の森を鳴り響かせる。そして、太陽が西にゆっくりと沈む時、私たちはおしゃべりを止めて指笛を鳴らす、迷った鹿たちへの合図として——戦争で敵と出会ったときにラッパが鳴らされるように。

シルヴィオ 私はこのように田舎の羊飼いに負かされるのか？美しい緑の服を着た奇麗な木こりたちを（これまで見たことのないようなものだが）彼

女に付き従う護衛にしよう。

ジェミュロ それでは、森の番人がこれまで見たことがないような元気な羊飼いたちを彼女の護衛にしよう。彼らの相貌と綺麗な服装は5月のように美しく見えるはずだ。どこだ、陽気で有名な羊飼いたち？ちょっと近くに来てくれ、君たちの羊がこの草原で餌を食べている間、腕前を見せてくれ——君たちの歌で悲しみを消すことができるかどうか示すんだ。

羊飼いたちが歌いながら登場。

シルヴィオ ジェミュロは自分が一番だと思っているのか、単純な繰り返しだけの歌だけで？いや、私には仲間がいる。彼らの甘美な声は、最も美しく歌う鳥ナイチンゲールが奏でる音色よりももっと優れている。その仲間たちがここにいるから、彼らが歌い終わったら私たちの優劣を判断してください。

木こりたちが登場して歌を歌う。

ユーリミン どちらともありがとう。あなたたちはどちらとも非常に素晴らしかったです。あなたたちの価値を伝える術は私にはありません。そしてあなたたち二人の親切を褒め称えます——二人をずっと大事に思い、愛し、尊敬します。といたしますのも、知らない人、そして見知らぬ男性から女性がこのような親切を受けたことはないでしょうから。ですが、急に始まったこの口論を終わりにするため、私が訴えの判定人となりましたので、私の結論はこうです——あなた¹には私の住処として小屋を提供いただきたく存じます。そしてあなた²には私が面倒をみる羊の群れを提供してもらいましょう。私の感謝する気持ちはどちらにも公平にお返ししたいのです。

シルヴィオ 賛成です。あなたへの愛のため、私はこのように自慢しましょう——私には非常に美しい間借り人がいます。

ジェミュロ そして私は、彼女が私と同じ仕事をすると言ってくれたことを私の豊かな財産と思うことにしましょう。

シルヴィオ では、ここにいる皆が不当な目にあっていないことの印とし

て、これから歌を歌いながら彼女を案内しましょう。

第 1 幕の終わり。

第 2 幕

第 1 場

アスカーニオと彼の従者ジョキュロ登場。

アスカーニオ あっちへいけ、ジョキュロ。

ジョキュロ お傍にいます。

アスカーニオ ジョキュロ、彼女はどこだ？

ジョキュロ 知りません。

アスカーニオ いつ彼女は出て行った？

ジョキュロ 知りません。

アスカーニオ 彼女はどの方向に行った？

ジョキュロ 知りません。

アスカーニオ どこで彼女を探せばいい？

ジョキュロ 知りません。

アスカーニオ いつ彼女を見つけることができるだろう？

ジョキュロ 知りません。

アスカーニオ お前に罰が当たればいい！お前は何を知っているのだ？

ジョキュロ 知らないということだけです。

アスカーニオ 何、悪党め。

ジョキュロ そのようにせっかちなのでしたら、自分で探してください。何を騒いでいるのです？彼女がどこにいるか知っているなら、彼女を探す必要などありますか？あなたは気が変になっていると思います。彼女を探すべき時にあなたはどこにいたのですか？今になって、角本³を失くした少年のように泣きながら彼女を探すなんて。

アスカーニオ ああ、私の少年。

ジョキュロ 私のご主人様。私はあなたと同じくらい良い言葉を言うことができますよ。どちらも同じことです。

アスカーニオ 私に慰めは与えてくれないのか？

ジョキュロ ええ、あなたの不幸という空腹の胃に与える、どんな小さな慰めも私の口からは出てきません。今はひどい飢饉なのです——神のご加護がありますように。

アスカーニオ ジョキュロ、私の胸は悲しみでいっぱいだ。だが私には希望もあり、その希望に欠けているのは慰めなのだ。

ジョキュロ あなたの胸と私の腹は全く正反対のようです。あなたは肉を食べる食欲が出るように歩き、私は自分の腹に肉を入れるために歩いています。あなたの胸はいっぱい、私の腹は空っぽだ。ここでその二つが離れることになったら、また会えますように。そして私の腹がいっぱいになって、あなたの胸が空っぽになりますように。

アスカーニオ 少年よ、大切な主人であるこの哀れなアスカーニオにお前が抱く愛のため、お前の知恵をできる限り絞ってくれ、ユーリミンが私のところに戻ってこられるように。

ジョキュロ 私の知恵がそのようにできるのなら、私はもっと何か言うことができるでしょう。ですが、それには軽やかな足が必要です。この10本の素早い足の骨が彼女を探さねばなりません。小さな犬のように駆け回りましょう。私の顎髭ほどの大きさの茂みでも隈なく覗き込んでいきましょう。どんな動物の小屋も隅々まで探しましょう。彼女が大地の上、下、いづれにしようとも見つけ出します。

アスカーニオ 待て、ジョキュロ。それは駄目だ。もし我々が別れたら、私は彼女とお前を共に失うことになる。この森は広いし、こうやって歩き回るとお前は道に迷うだろう。私の恋人も見つからないだろう。

ジョキュロ どうか行かせてください。

アスカーニオ どうかここに居てくれ。

ジョキュロ 本当に私は走っていきますから。

アスカーニオ どの道に行くかわかっていないのだろう。

ジョキュロ どの道でも同じです、匂いを辿っていきますので。もし彼女を探しに行かせないのでしたら、彼女があなたを探しにくるまで、ここで横になってください。あなたがこの辺で彼女を探させているとは彼女はちっとも思っていないでしょう。

アスカーニオ ああ、ジョキュロ、この世の慰めであり、今や私の唯一の喜びである少年、お前と離れる前に一言——この場所を見たか？夏の色とりどりの花々で覆われたこの草原のベッドで——（彼は地面に横たわる。）この木陰を私の住処にしよう、お前が戻ってくるまでは。

ジョキュロ 道が途切れていなければ、私があなたの元に戻るまで時間はかかりません。

ジョキュロは観客に話しかける。

お願いですから、私の主人を見ておいてください。ここに、あなた方のところに主人を置いていきますので。もしあの女性⁴に偶然会うことができたならば、次に風が吹く時までには私から知らせがあるでしょう。

ジョキュロ退場。アスカーニオは独りになる。

アスカーニオ 私は無駄に不安を感じ、頭を叩いている、恋人を探すために。ユーリミン、ユーリミン、戻っておくれ。君の姿で美しい朝を金色に染めておくれ。だが、君の名前を呼ぶのは不安だ。おしゃべりなエコーが君の名前を知ったなら、エコーはユーリミンという音を延ばそうとせず、空気で出来た自分の舌の上にその音を置いておくだらう。私の恋人の存在によって飾られた森は、秘かな力でどの道も閉ざし、隠してしまうだろう、彼女をずっと彷徨わせておきたいから。そして彼女をずっと見ていることだろう、森はその緑を保ちたいから。鳥の聖歌隊をそこに留めておくことだろう、冬を年から完全に追放するために。だが、なぜ私は自分の境遇を嘆き続けるのだ、彼女は去り、嘆いてもあまりに遅いのに？眠気で目が塞がってきた——ああ、強い眠りよ、あなたの力に私は屈します。

彼は眠る。ジュノーとアイリス登場。

ジュノー 来なさい、アイリス。

アイリス アイリスはここに控えています、ジュピターの妻である偉大なジュノーの命に従うため。

ジュノー アイリスよ、お前がよく仕えてきたことは知っています。私がジュピターの妻となって以来、私が呼ぶとお前はいつも現れ、私の命令に最も忠実でした。お前も知っているでしょう——全ての神々と共にいるあの愛の女神が、天において強い力を持ち、全ての者が彼女の命令に身を屈めて従うことを狙い、偉大なるジュノーの命令に逆らっていることを。彼女のハトと白鳥、スズメは丁寧に扱われ、ジュピターの祭壇の上に高く置かれなければならない。だが、私の下で働く星を身に付けたクジャクは、ジュピターの宮殿の門内に入ることをほとんど許されていない。そしてあの女神自身、自分が気に入られているのを知っていて、あのいかがわしい女は私と争おうとしています。彼女の淫らないたずらによって、アスカニオとユーリミンをもてあそばさしているのです。だが、彼女の技全てがあったにしても、愛の女神は知るでしょう、ジュノーは女性であり自分の望みは叶えるということ。

アイリス 女神様の願いは何でしょう。アイリスが聞いてもよろしいでしょうか。

ジュノー アイリス、この仕事をお前に託します——高慢なヴィーナスと彼女の盲目の少年に立ち向かいなさい、彼女とその子供が怒り、二人が仲たがいがするまで。そして彼らが面と向かって罵りあい、神々をも罵るまで。

アイリス 女神様、あなたがそれに同意されるのなら。

ジュノー では、お前がこれから辿っていく道筋をよく聞いておきなさい。この深く茂った森に、地面に突き出た薄暗い洞窟があります。真暗でじめじめして険しい斜面になっており、太陽の光は差し込みません。その洞窟は昼を怖がらせるので、その中の世界の半分が夜になっています。また、沼地の霧と蒸気が立ち込めています。洞窟の中にモルフェウスが住んでい

ます。雄鶏の鳴く声も、人々を目覚めさせる鐘の音も聞こえません、夜番の犬が眠りを邪魔することも全くありません。丘の周りでは何の音も聞こえず、全てが静かで、静寂を命じられており動かずにいます。この洞窟の中の地面の上に、黒く覆われた板の寝床があります。そこに眠りの神がいるでしょう、いつも眠たげな様子をして。行きなさい、アイリス、そして私の命令を実行しなさい。眠りが起きるまで戸を叩き、私からの命令として、ここで寝ているアスカーニオの元に幻となって現れるよう命じなさい。美しいユーリミンを彼がどうすれば見つけれられるか、幻影の中で方法を知らせるのです。

アイリス ご主人様、あなたの命じるまま動きましょう。

ジュノー では急いで行きなさい、忠実なアイリス。お前が戻ってくるまで、私の孔雀と車は岸辺に留まりますから。

ジュノー退場。

アイリス 命じられた仕事に今から取りかかろう。眠りの神のいる黒い洞窟へすぐに行こう。そして、眠たげで怠惰な神が起きるまで暗い部屋を強く揺らそう。洞窟の戸を叩いて、青白い死が眠りの目を捕らえていたとしても、彼を起こそう。彼が私の声を聞く時は、恐怖で彼の髪を逆立たせよう。静かにしておくれ、大気よ——思いよりも速く、風に乗ってアイリスが華麗に行く間は。ソムヌス、ソムヌス、ソムヌス。(戸を叩く。少し止まる。) 起きないのですか？熟睡しているのですか？こうなったら、もうひとしきり叩こう。ソムヌス、ソムヌス！

戸を再び叩く。

ソムヌス 昼のこんな時間に誰が呼んでいるのだ？こんなに戸をたたき続けて？天罰が下ればいい——寝かせてくれ。

アイリス 起きなさい、眠りの神、そしてすぐに出てきなさい。さもないと、この戸を叩いてお前がもう眠れないようにしますから。

ソムヌス 昼寝をしたら、すぐ行くから。

アイリス 出てきなさい、この獣、馬鹿、石ころ、出てきなさい。さもない

と天国と地獄が驚くまでこの戸口で大声を出しますよ。ソムヌス！

ソムヌス 天罰でお前の顎が引き裂かれればいい！

アイリス ソムヌス？

ソムヌス アイリス——お前だと思った。どうした、狂った娘、私に何を望むのだ？

アイリス 強大なジュノー、ジュピターの不死の妻の遣いで私はやってきました、ソムヌス。お前に命じます——この紳士のところに姿を現し、彼が寝ているこの場所で、彼の恋人を彼の内なる目に見せなさい、あなたにできる限りの本物らしい姿で。

ソムヌス 私を起こしたせいで縛り首になればいい。私には三人の息子がいる。長男はモルフェウスと呼ばれていて、人間の姿や容貌を見せることができる。次男はアイスラー、彼が命じれば鳥や獣の姿を見せることができる。三男がファンタソー、彼は生きていないものを見せる。この三人から好きなものを選ぶといい。

アイリス モルフェウスを——彼が人間の姿で現れることができるのでしたら。

ソムヌス モルフェウス、完全な似姿でここにやって来い。その貴婦人は何と行った？

アイリス ユーリミンです。

ソムヌス ユーリミンの姿で——この紳士に見せるのだ、彼の恋人がどうなったかを。

アスカーニオの傍に跪く。

ユーリミンの姿をしたモルフェウスが登場。

モルフェウス 私の愛するアスカーニオ、この幻を見てください。ユーリミンがあなたのもとにこうして現れました。眠りがあなたの眼から離れたらすぐに、あなたの右側にある道を進んでください。年老いた隠遁者におそらく会うでしょう。その人は誰も覚えていない時代からそこにいます。この聖なる男性（老いた神父）は森の中で草の根と薬草を集めています。皺

の刻まれた彼の額はかつての強さを表し、顎鬚は冬の雪のように真っ白です。彼は私が経験した災難を話してくれるでしょう、そして最後には私たちを会わせてくれるでしょう。このようにあなたの恋人はその像をあなたに見せます、できることなら姿をそのまま見せたいのですが。

アイリス アスカーニオは恋人の像を抱きしめようと手を伸ばしている。

モルフェウス 幻影が完全に彼に影響を及ぼしている。熱が少し治まったら、彼はすぐに目を覚ますだろう。

ソムナス 他に何か私にできることはあるか？

アイリス いいえ、ソムナス。お前の寢床に戻ってください。ジュノーがあなたに褒美を与えるでしょう。

ソムナス それではお休み、アイリス。私はまた寝ます。

アイリス さようなら、モルフェウス。私はジュノーのところへ急ぎます。

モルフェウス では私はできるだけ急いで眠ろう。

全員退場。

アスカーニオ、びくっと動き、言う。

アスカーニオ ユーリミン、私の天使、待ってくれ。そんなに早く消えないでおくれ。待ってくれ、私の女神、君はどこに逃げるんだ？戻ってくれ、私のユーリミン、私だよ。どこに話かけているのだい？君の顔を見せておくれ。今、まさにこの場所で、私は君を見たのではないか？立っている君を見たのではないのか？ここで、君の足がその大地を祝福したのではないのか？ユーリミン、聞いてはいないのか？君の敵からは逃げればいい、だがアスカーニオは君の友だ。そうやって、怯えた野兎は追いかけてくる獵犬を避ける。雌鹿は狩人に傷つけられないように逃れる。震える鳥は鷹の爪から逃げようとする。奴隷は怒った主人の鞭から逃れる。私はポイボス⁵がダフネを追ったように君を追うのではない。犬が震える子供を追うよう追っているのでもない。あれは君の姿だった——ああ、だが僕は君を見ていない。あの姿は私よりも神々にふさわしい。だが、もし夢の中に真実が見つかるのなら、君はこの地面の辺りにいた。僕はこの森と木々の間

を探して回ろう、決して休みはしない、君を見つけるまで。(退場)

第2場

一方のドアからモプソが歌いながら登場。

モプソ ターリテロ ターリテロ ターリテリー ターロ こんなに陽気に
羊飼いの少年は 角笛を吹ける 朝早く 夜遅く いつもこの小さい少年
は座っている 陽気に笛をふきながら

別のドアからフリスコが歌いながら登場。

フリスコ 小さな角笛を吹けるのかい それはいい とてもいい 小さな角
笛を吹けるのかい 緑の葉の間で

ジョキュロが歌いながら中央に登場する。

ジョキュロ 私の敵の運命の女神 どうして私にしか目面をするのですか
私の運は決して良くならない あなたはずっと私の苦しみを生み出すので
すか あなたは私の喜びを戻してはくれないのですか

フリスコ 自分の小道で愉快になることもできず、僕はこのように邪魔され
なければいけないのか？

ジョキュロ 私は憂鬱なのだが一人にはなれないのだ、悪い奴のために。

モプソ どうして、もうすぐ縛り首になる奴が僕のところにやって来たの
だ？

フリスコ おい、君は誰だ、それに君も？

ジョキュロ 私は宮廷人に仕える小姓だ。

モプソ 僕は羊飼いの下で働く少年だ。

フリスコ 君は雌羊という娼婦に仕える家来だな、そして君はいかさまさい
ころの仲間だな。

ジョキュロ お前は誰だ？

フリスコ 僕は森番の少年だ。

ジョキュロ 権限のある無法者だな。自分の品物に印を付けたこともない

し、自分がどうやって他の人の物を手に入れたかも知らないのだ。

モプソ 角でしか自分の牛がどれか分からない人間だ。

フリスコ おい、君の主人の羊の角のこともそのように言えるかもな。

ジョキュロ そうだ。火薬のように火がついて、風が吹けば消える。

フリスコ カンカン鳴って、花火のように尾を振っている。

ジョキュロ なんだと、悪党たち、私の知恵の鋼で君たちの理解力の火打石から火を噴きださせてやるぞ。私のことを聞いたことがないのか？

モプソ 知っているよ。僕が知っているあのジョキュロなら、その偉業は聞いたことがある——この辺の村のビール売りの女たち 37 人ほどを騙したんだってな。

ジョキュロ 仕立屋の針か、あるいはコルセットを触る女の手のように機敏だな。

モプソ 君の冗談はあまりに低俗だ。

フリスコ 触って楽しむような冗談だ。

ジョキュロ 緑色の胴着よりも良い服を一度も着たことがない身分の低い悪党がこんな冗談を言うなんて、誰が思うだろう？

フリスコ 君たち宮廷人は名誉を全て持っているが、知恵を全てもっているわけではないからね。

モプソ 待て、この中で勝つのは君の知恵ではないよ。

ジョキュロ やさしい悪党たち、君たちと一緒にいることは、娘にとっての真夜中の音楽のようなものだ——一人で寝ていて、願い事をしている時の。

フリスコ そして僕には君は歓迎だ、部屋付きの侍女が新品の棒⁶を喜びのと同じようにね。

モプソ 静かに、ここに来るのは誰だ？

妖精たちが歌い、踊りながら登場。

妖精たち 月の下で私たちは楽しみ遊ぶ 夜と共に私たちの一日が始まる
私たちが踊れば露が落ちる 小さな子供たちは皆 その露を踏みなさい

小さな蜂のように軽やかに 二人で 三人で 私たちは歩き回る 歩き回
る

ジョキュロ これは何の妖精たちだ？

フリスコ この森によく現れる妖精たちです。

モプソ 僕たちはひどく抓られるだろう。

妖精1 音楽はいかがですか？

妖精2 良い音楽はいかがですか？

妖精3 楽しい音楽はいかがですか？

モプソ これを見ないといけない、もう逃げられない——いいえ、結構で
す。大変愉快です、ありがとう。

妖精1 でも音楽は聞くでしょう。

フリスコ どうか、手間のかかることはやめてください。

妖精2 1ペニーもかかりませんから。

ジョキュロ フィドルはどこだい？

妖精3 とても良い楽器があります。

モプソ 君を何と呼べばよいですか？

妖精1 私の名前はベニーです。

モプソ 残念ですが、君を財布に入れることはできないね。

フリスコ あなたは何と呼べば良いですか？

妖精2 私の名前はコオロギです。

フリスコ 君のために煙突になれたら良いのですが。

ジョキュロ とても小さい君、あなたの名前は何ですか？

妖精3 私の名前は小さい小さいトゲ。

ジョキュロ 小さい小さいトゲ？ 君は危険な妖精だね、この国の小さな女
の子たちを皆怖がらせてベッドから飛び出させるね。誰に捕まってもかま
わない、君でさえなければ。

妖精1 私は丘の上に行き 花の上を跳ねる それからハエに乗って 空の
上に運んでもらう そして歩き出す

妖精 2 露の雫が落ちて 私の頭に降りかかる時 頭を振って跳ね回る 歩き回る

妖精 3 女の子が寝ているとき 髪の下をのぞき込む そこで楽しみ 遊ぶ
それからノミのように彼女を噛んで 私は跳ね回る

ジョキュロ 君たちをどこで捕まえられるだろうと思ってたんだ。

妖精 1 踊りますか？

ジョキュロ いいや、足をうまく動かせないで。

妖精 2 いいえ、あなたは是非とも踊って歌わなければいけません。もし拒絶されるなら、私たちはあなたを抓って青黒い痣をつけますよ。さあ、行きましょう。

彼らは皆輪になって踊り、以下のように歌う。

全員 綺麗な輪になって 踊ろう 踊ろう このように踊ります 踊ります
このように歌います 行こう行こう この緑の上を あちらこちらで 皆で回ろう 中へ 外へ 私たちの立派な女王のために 綺麗な輪になって 踊ろう 踊ろう このように踊ります 踊ります このように歌います 行こう行こう この緑の上を あちらこちらで 皆で回ろう 中へ 外へ 私たちの立派な女王のために 綺麗な輪になって 私たちは踊りました 元気に踊って 歌いました 皆で回ろう 中へ 外へ この緑の上を あちらこちらで 行こう行こう 私たちの立派な女王のために

第 3 幕

第 1 場

アポロンと三人のカリス⁷登場

カリス 1 いいえ、ポイボス、あなたの沈黙はあなたの悲しみを友人から隠そうとしています。彼らは、もしそれぞれの点において原因を知っているなら、その結果である症状を治癒するために最大の力を示せるのですが。

アポロン 女性たち、あなたたちの判断は誤っている。私が悲しそうに見えるから、あなたがたはその理由を私の秘密の悲しみのせいになっている。だが、君たちは私が憂鬱なのを何度も見たことがある。私が悩んでいるように見えるのは、多分暑い今の天気のためだろう。

カリス1 隠せないことを飾ろうとする良い方法ですが、ポイボス、あなたの顔つきからは、あなたの考えに潜む、不自然な刻印を残した思いが見えます。それによると、あなたは以前のあなたとは別人のように見えます。

アポロン いや、女性たち、私に関してあなたたちは誤解している。あなたたちが想像することが本当だと思わせる、どんな兆しやしるしが見えるのだ？

カリス2 アポロン、これらの点から大きな疑念が生じています——あなたは他の人と一緒に居る時、以前ほどは楽しそうではありません。あなたは一人で歩き、誰も従えずにさまよっています。私たちが時々使っていた楽しい遊び道具は朽ち果て、古びています。この森の地面に最近まで鳴り響いていたあなたの楽器は、その銀の音色を失ってしまいました。あなたが狩りの時に使っていた弓は箱にしまわれて、長い間引かれていません。今のあなたは、以前のアポロンとはどんなに変わったことでしょうか——かつて月桂樹の木陰に座り、象牙のリユートの静かな調べで妖精たちを魅了し、踊らせたアポロンと？あるいは、弓を引いて大蛇ピュトンの鱗の生えた羽に鋭い矢を放ち、傷ついて死ぬその蛇から泉のような血を噴き出させたアポロンと？その時と今、あなたを見た人は驚くほどあなたが変わったと思うでしょう。

アポロン ああ、美しい女性たちよ、私の悲しみを明らかにしたなら、古い傷を再び蘇らせることになるだろう。その傷は今も私の心へのしかかっており、以前の嘆きの傷を残しているのだ。

カリス3 ポイボス、あなたを大事に扱い、アポロンの名前を愛する者たちと私たちのことを思ってくださいるのでしたら、あなたの悲しみが湧き上がる嘆きの泉を私たちに吐き出してください。もし何らかの方法であなたの

悲しみを治すことが私たちにできるのであれば、最善を尽くすよう命じてください。私たちはあなたに危害は加えませんから。

アポロン 優しい女性たちよ、癒しは期待しないが、私の現在の悲しみの訳を教えよう。1年のこの時期、この頃だった——その時が十度、呪われればいい。高貴なスパルタの競技を見るためにデルポイから旅をした際、そこで私は喜びを与えるものを見たのだ。アミュクラーズの息子、ヒュアキントスという名の立派な美しい少年で、年は15歳——私は彼を小姓にしようと思い、ジュピターがギャニミードに抱いていたものと同じくらい大きな愛情をその少年に感じていた。競技の中で、ハンマーを投げる力試しに加わった。私は腕の力を振り絞って身構え、ハンマーを大分遠くへ投げ、それは他のものよりも先へ飛んでいった。ヒュアキントスはその競技を楽しんで、同じ力比で自分の男らしさを証明したいと願った。そして、ハンマーが地面に横たわる前に取ろうとした。ハンマーは激しい力で高く飛んで彼の頭に当たり脳を打ち砕いた。そうして、ああ、私の美しい少年は死んだのだ。

カリス 1 辛い運命です、ポイボス。ですがそれは終わったことですから、無駄な嘆きは控えるよう私たちは求めます。

アポロン 女性たちよ、私の悲しみが無駄であることは知っているが、でも彼の死を悼むことは止められないのだ。

カリス 1 あなたを気鬱から遠ざけるため、ウーラニアが何か楽しい歌を歌います。

アポロン ああ、どんな歌であっても、私の悩んだ心にはいかなる安らぎももたらしはしない。

カリス 2 駄目でしょうか、ポイボス？あなたを陽気にするため他にどのような気晴らしを見つけられるでしょうか。

アポロン 美しい女性たち、皆に感謝したい。だが、どんな楽しみも気晴らしも私の悩みを解き放つことはできない。私の悲しみは自然な成り行きのもので、それが終わったならば私は陽気になって、もう悲しみはしないだ

ろう。

カリス1 では、私たちに何をしてほしいですか。

アポロン できれば、ここを去って、私を一人にしてほしい——私が悲しみを味わうために。

カリス2 では、ポイボス、あなたが良くなることを願うばかりです。(カリスたち退場)

アポロン やさしい女性たち、君たちの気遣いに感謝しよう。ああ、ポイボス、お前は見下げたやつだ、自分の痛みを隠すため、嘘の言い訳を言うとは。ああ、ヒュアキントス、私の少年、お前のためにこのようにつらい思いをしているのではない——いや、私の心の隠れの場の、お前よりももっと深いところに別の人が座っている。つい最近、その人を見てこの懊悩が生じたのだ。だが、その美しさでこのように私を苦しめる女性は女神ではないし、天上の者でもない。この心地よい森を訪れる妖精でもないし、花や野原、あるいは河の女神でもない。だが、それらの妖精全てと同じく妖精と呼ぶことができる人なのだ。ユーリミン、いかなる神が君をここに連れてきたのだ？ そのように言ってもいいだろう、君は神に近いのだから。そして、ジュピターが凌辱し征服した女性よりも、君は天の神に見紛う姿なのだから。ここに座って、私の悲しみをまた起こそう——君の名を称える歌をしぼし歌うために。

歌

イダ山⁸の森の中
パリスが群れを飼っているところで
他の全ての女性よりも
彼は君を好んだであろう
パラスがどんなに化粧をしたとしても
彼女の顔はただ青白く見えたであろう
ジュノーは恥ずかしくて顔を赤らめたであろう
ヴィーナスも魅力を失って見えたであろう

ユーリミン 君だけが金のリングを持つべきなのだ
君の神々しい姿は他の全ての人よりも大きく勝る
ああ 幸せなボーイボス 幸せに
私は最も幸せになるだろう
美しいユーリミンが喜んで私と共に愛してくれるのなら

ユーリミン登場。

ユーリミン 宮廷に住むことと、人のいない森の中を歩くことは大きな違い
だけど、他に選択の余地がない危険な時は、過酷な隠れ家も拒絶できな
い。親切な紳士の方、私の羊たちを見ませんでしたか？見つけられないか
と不安になっているのです。ですが、私の主人が鞭を持って雌羊を待っ
ています。見てはいませんか？あなたが何も言わないので分からなくなりま
す。群れを見つけるまで、さらに遠くへ行かねばなりません。

アポロン かわいい乙女、何を探しているのですか。

ユーリミン 鹿の群です。

アポロン 少し前に見ましたが、ここにはいません。

ユーリミン どこでしょうか。

アポロン 1、2時間前、野原で草を食べているのを見ました。

ユーリミン 羊たちを連れて戻るのは大変です。ありがとうございます。

アポロン いや、美しい妖精、私と一緒にいてください。

ユーリミン 仕事をしないわけにはいきません。

アポロン お願いですから。乙女、この人気のない森の木陰に居るのはとて
も快適ですよ。花が咲いて大きな枝の生えたこの月桂樹は、焼けつくよう
な暑さからあなたを安全に守ってくれます。

ユーリミン 私は仕事のため急いでここを離れないといけないのです。

アポロン ああ、あなたが征服した男とともに居てください。休みなくあな
たのことを思い続けている男とともに。望んでいたあなたの顔を見て喜ん
でいる男とともに。もしあなたがあなたの愛にふさわしい者と彼をみなす
なら、その喜びは他の全ての喜びを上回るであろう男とともに。

ユーリミン え、あなたは他の恋人を望まれるのですか。そして、あなたの恋人のためにその月桂樹の花冠を着けるのですか。

アポロン いいえ、美しい女性——私はこの月桂樹を愛しているが、その十倍以上、私はあなたを愛しています。そして、この月桂樹がいつも瑞々しい緑を保っているように、私の愛もそう見えることでしょう。

ユーリミン 本当にあなたはひどいことをしています、こんなに長く私を仕事から引き離すなんて。

アポロン 待ってください、美しい女性。よく考えた上で見てください、あなたの寵愛を求めている男が何者であるかを。私は丘や岩場にたむろしているものではありませんし、羊の群れに付き添っている羊飼いでありません。私は、あなたの美の喜びに引き寄せられた酒神サテュロスではないし、牧畜の神ファウヌスでもありません。神が知っていることをあなたは知らないのだ、人間よ——あなたは私がここにいることをひどく怒っているが。

ユーリミン ですが、もし話していただけるのであれば、私は知ることになるかもしれません。

アポロン 私の父は最高天⁹に住んでいます。私はジュピターの息子として知られており、デルポイの人々は私を敬っています。私によって、現在、過去、そして未来のことが分かります。私によって、調和の法則を知ることができます。私によって、自然科学の知の秘密を見つけることができます。さらに地面に育つ草の効用も知ることができます。これらの点からあなたは理解するでしょう、私がポイボスであり、あなたを愛しているというのを。

ユーリミン いいえ、この話から、あなたは偽りの家系を述べて私を騙そうとしているとわかります。前にあなたが言ったように、あなたがジュピターの息子であるのなら、人間の乙女に恋することであなたはあなたの神性を蔑ろにしています。行かねばなりません、ご親切には礼を言います。

アポロン ああ、あなたの恋人をこのように見捨てないでください。

ユーリミン 心からお願いします、私を行かせてください。

アポロン この道には生い茂った木々や鋭い棘の付いた草があり、あなたの柔らかい足を刺すでしょう。曲がったキイチゴの棘があなたの服の裾にまとわりつくでしょう。イガや茨があなたのスカートに引っ付くでしょう。

ユーリミン ポイボス、もしあなたがジュピターの子であるのならば、無力な乙女を力づくで触ろうしてあなたの神性を汚してはいけません。たとえあなたが神であろうとも、そのようなことをすれば、大地とその上にいる人々があなたの恥ずべき行動を大きな声で叫ぶでしょう。

アポロン あなたをととても愛している男に対する残酷な言葉です。

ユーリミン 私にその愛が分かるのでしょうか。

アポロン 私は分かっています、伝えることができます。それに感じてみえます。

ユーリミン もしあなたの愛があなたの主張するように真摯で大きなものであるのなら、その証拠として、一つだけ願いを聞いてください。

アポロン そうしましょう、私の父であるジュピターにかけて誓います——ただし、あなたの願いがあなたを傷つけるものでなく、私に危害となるものでもないのならば。というのも、かつて私の息子フェートンはそのように頼みごとをして、その結果破滅したのです。彼は懇願したことで命を失い、私はその願いを叶えたことで息子を失いました。

ユーリミン では、ポイボス、これが願いです——もしあなたがあなたの主張されるような血統であるのなら、あなたが語るようにジュピターの息子であり、思慮なしにではなくその肩書を自分のものであると主張するのなら、その神性の何らかの印をここで示してください。そして、すぐに私を乙女の姿から男性へと変えてください。

アポロン いかなる愚かな欲望が、生まれついた性から変えてほしいと願うようにあなたの心を動かしたのか？女性としての姿において、人間ではなく神を、あなたの愛を追い求めて動かすことができるのならば、あなたの生まれついた自然の恵みで満足するがいい、男性の姿を身に着けようとは

願ってはいけない。さらに、このことをあなたに伝えましょう——あなた
は決して、乙女よりも美しい男性にはなれないのだ。

ユーリミン そのような浅はかな言い訳は、あなたがアポロンの名前を騙っ
ているか、そうではないか、はっきり表しています。あなたの術が私の要
求には遠く及ばないから、あなたは相手を批判するのでしょうか。

アポロン では、私の疑いようなない神性を証明するため——そのことによ
り私は愛する人を永遠に失うことになるのだが——あなたの願いは叶えま
しょう。あなたは男となった。私はもう何も言いません、私が約束をうま
く果たせるということ以外は。そして今、あなたは変わった身体で歩くこ
とになりますが、あなたの誓いにはこの苦行が加えられることになるでし
ょう——あなたは男性であり、男性を甲斐なく愛することになるのです。
そして、愛しながら、乙女にまた戻りたいと願うでしょう。

ユーリミン 私が男性を愛するかどうかはともかく、お礼を言います。私は
私の運命を受け入れましょう。そして、私の変化はあなたを失望させたの
ですから、あなたは新たに恋をすることができます。(退場)

アポロン 今、私は捨てられたのだから、私が以後愛するのなら、より良く
受け入れられるだろう。だが、愛する私の運命がどのようなものであろう
とも、ポイボスがあなたを愛したということをお前は自慢できるだろ
う。(退場)

注

- 1 シルヴィオ。
- 2 ジェミュロ。
- 3 アルファベットなどを書いた紙を貼り付けた板。
- 4 ユーリミン。
- 5 アポロン。
- 6 ひだ襟のひだを整えるために使う棒。
- 7 美と優雅の女神。
- 8 ギリシャの神々の住処。
- 9 天の最も高い所。